

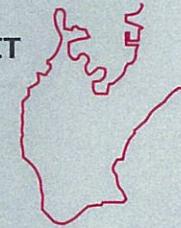
# WEST

HAKODATE

①

[ハコダテ・ウエスト] 2021 SPRING

HAKODATE  
WESTERN DISTRICT  
GUIDE



西部地区に暮らすという選択。

街の記憶。

町名の変遷

TOWN GUIDE & INFORMATION

## 絵に描いたような景色が目の前に。 ある美術家の自宅兼アトリエ。

小宮伸二

**坂** の街・西部地区の中でも、最も傾斜のある幸坂を登りきったあたり。明治41年築の旧ロシア領事館を背に小さな路地に入った先に、淡色の一軒家がある。そこは、1980年代からインスタレーション作品の創作や舞台美術を手がけ、国内にとどまらずヨーロッパやアメリカ各地でも活動をしてきた現代美術家・小宮伸二さんの自宅兼アトリエだ。

小宮さんが生まれ故郷である函館に戻ったのは平成20年のこと。函館で暮らす高齢の両親のことを考慮し、生活と創作の拠点を地元に移し



た。小宮さんが主戦場とする「インスタレーション」といわれる現代美術の表現方法。木材や金属品、電子機器や部品、紙や布など、使われる素材は作品やテーマによって多岐にわたり、ある程度の広さのある作業空間と材料の保管場所が必須だ。それを考慮したとき、傾斜の険しい坂の最頂部のさらに路地裏にある一軒家は、彼にとって不便でしかなかった。「最初はね、もう少し田舎というか、土地が広くてまわりに家がないような郊外の場所がよかったです。でもこの家を見つけて、最初に見に行ったりとき妻がすっかり気に入って。挙げ句の果てに『ここじゃなきゃ函館に住まない』と言い出して(笑)」築25年の中古住宅で決して広い間取りではないが、1Fと2Fに木製のデッキがあり、そこから一望できるのは函館港と市街地。誇張ではなく、絵に描いたような美しい函館の景色が日常的に目の前にある家だ。

家を購入後、小宮さんは内装全般や外張りの一部、屋根など、できるこ



とはすべて自分でやった。そして1Fの2部屋を仕切る壁を通して、作業場として機能するようデッキも修復してアトリエをつくった。「最初はこんな狭いところでものを作れるんだろうかと思いましたが、なんとかなるもんですね」

西部地区で暮らすようになって10年以上が経ち、あらためて思うのは、この生活地区特有の不思議な人のつながりだ。「ここに住んで間もない頃、近所を散歩していたら、開業を間近に控えた小さなギャラリーがあつたんです。そこをチラッと覗いたら

オーナーさんとお話を弾んで、そのオープニングの個展を僕がやらせてもらうことがその場で決まって、そのあともいいお付き合いができた。あとは同じ西部地区にいる人たちから気軽に『ちょっと遊びにおいでよ』と呼ばれたり、逆に顔を見に来てくれたり。なんていうんだろう、たとえ自分が望んでなくても強制的に人と会うことになるというか(笑)。でも、これは作業に没頭すると一人こもってしまう僕みたいな人間にとっては、ありがたいしうれしいことなんですね」。

(上・左)1Fにあるアトリエ。主にインスタレーション作品の制作につかう細かなパーツや道具を収納し、小さめのオブジェなどを制作するための場所。(下)アトリエとつながっている1Fの作業用デッキ。目の前に広がるのは、本文でも触れた美しい函館の海と街の景色。



## 西部地区に暮らすという選択。

Living in the western district.

縁あって出会った市の伝統的建造物指定の家と、そこをずっと残したいと思う強い気持ち。

一瞬で心を奪われた、ここでしか見られない美しい景色。同じ街に暮らす人たちとの出会いや心地良い関係性。

この街なら仲間たちと一緒に何か新しいことを生み出せそうな、胸躍る期待と予感。

すべては、ここが好きだから。暮らしや仕事の拠点としてここを選んだ人たちが語る、「西部地区で暮らす」ということ。

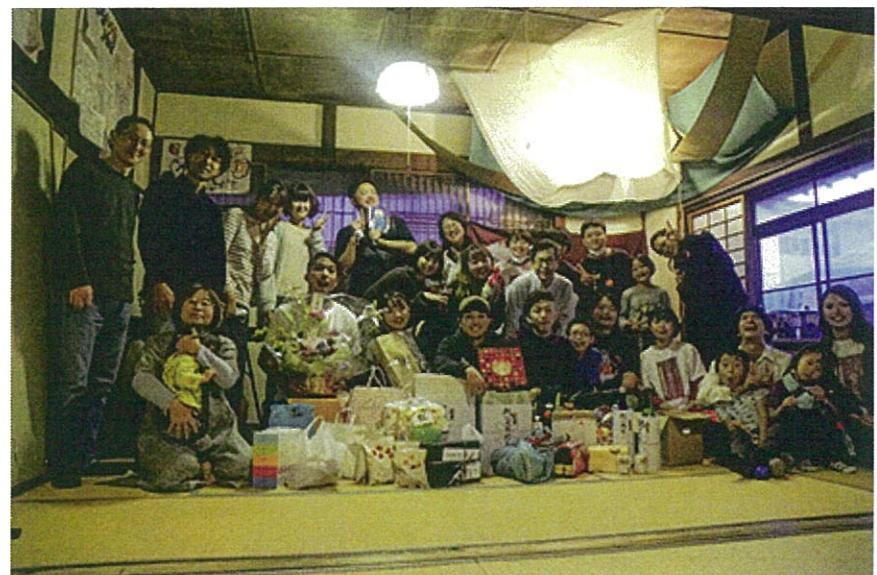
## 旧いまちに、新しい風。 大学生の古民家シェアハウス暮らし。 わらじ荘（旧野口梅吉商店）

**弁** 天町の『旧野口梅吉商店』は、大正2年生まれの上下和洋折衷様式の町家。米穀店として建てられ、その役目を終えたあとも界隈の歴史をまちに伝えてきた生き字引である。そしてこの建物が築年数100年を超えたいま、大学生が共同生活を送る『わらじ荘』として再利用されている。

“荘”的リーダーである下沢杏奈さんがこの建物と出会ったのは、北海道渡島総合振興局などが取り組む『木づかいプロジェクト』（地域材の活用を推進する地域政策推進事業）がきっかけだ。事業の一環で、同商店が提供された古民家のリノベーション

体験に参加し、持ち主の協力のもと、その翌年には彼女を含む4人の大学生が暮らしへはじめる。しかもその後は、同じく弁天町に『みなも荘』、谷地頭町に『きらく荘』をつくり、若者たちが地域と関わりながら西部地区で暮らしおこなう様子をSNSなどで発信している。

きらく荘・荘長の大室果瑚さん曰く「ここは『人生の学び舎「荘」』をコンセプトに、共同生活を送りながら自分について学んでいく場所です。誰かと暮らすことで得られる気づきがたくさんありますし、自分のスキを共有して生まれるイベントもあります。荘民と対話をしたり、学びをアウトプットしたり、何か発見したりしながら、自分を育んでいける場所です」という。



なお、これまで開催したイベントは「高校生と一緒に開いたSDGsに関するもの、地域の方々に開放して行ったものや喫茶店などです。昨年の夏の期間は月1回、地域の方が気軽に足を運ぶことができるイベントを行って、『みんなそらのした』『みんなほしのした』『わらじ荘1周年感謝祭』『まちあるきハロウィンフェスティ』を開催しましたね。どのイベントも荘民が内容を考え、準備や広報

を行いました」という。ちなみに、現在は『図書委員会プロジェクト(仮)』の企画を進行中とか。「わらじ荘の図書室スペースの大改造と、きらく荘のある谷地頭町でマイクロライブラリーを設置する、この2つを進めています。具体的なスケジュールや内容は決まっていませんが、地域の人と一緒に制作を進めていけるようなイベントも企画中です。春以降は、定期的なイベントの開催も復活させたいと思っています」（大室果瑚さん）

2021年3月現在の“荘民”的数は12名。学生を対象に荘民を募集しており、希望者は荘に実際に住んで体験をしながら、メンバーと共に過ごし、代表の下沢さんと面談する。日々の様子や各荘の詳細はHP（わらじ荘で検索）で発信中。

## 純和風建築の保存に貢献。 残すために、住むという役割。 石崎 理

**才** ルガニスト・石崎理（みち）さんが暮らす元町の家は、市の伝統的建造物に指定された大正11年築の木造2階建て住宅。建てられた当時の純和風建築の外観を残しながら、内装は全てが現代型の住まいにリノベーションされた、古くも新しい家だ。

この家と石崎さんが出会ったのは10年ほど前のこと。当時、伝統的建造物群保存会（以下、伝建）会長の尽力で、歴史あるこの住宅を人が暮らしながら

ら保存していくよう改修が行われ、そうして甦った建物を会の役員でもある石崎さんが借り受けた。「基礎の一部が腐っていたので、まずはジャッキで家を持ちあげて」など、修繕・改築の詳細から伝わってくるのは非常に大がかりな工事の様子と、伝統的建造物を守ろうとする人々の強い信念。「伝建の会長や携わった大工さんたちも含めて、家をなんとか良い形で残していくこうとする方々の想いが詰まった家なんですよ」。

お隣近所の付き合いがしっかり出来るところや、コロナ以前では世界中からやってきた観光客が毎日通りを散策していく、界隈が賑やかで明るい雰囲

気だったというのも、実際に暮らしてみて感じたエリアならではの景色だ。「大変なことって、ほとんどないんですね。たまに、敷地内で無断で写真を撮られたり…なんてことがあります、それもこのまちが『素敵』と思われることと思ってます。ああでも、冬場の坂道は大変ですね。これは私の勝手な夢ですが、まるで遊園地のように市電が山の麓まで走ってくれたら楽しいだろうなって想像することができます」。

今の家に暮らす以前から、西部地区が大好きだったという石崎さん。「郊外に行くと、日本全国どこも同じようなお店があつて似たり寄ったりですが、西部地区はここにしかない特徴と言うのか、人間でいうキャラクターのような物が存在していると感じています」

“ここにしかない特徴”的ひとつである古民家にいざなわれ、「残していく



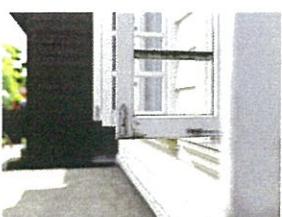
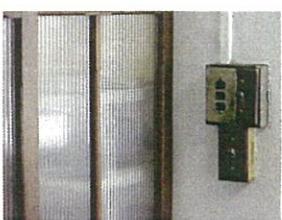
ために住む」という役割を担って暮らす石崎さん。「手を加えられてメンテナンスをしっかりしてきた古民家には重みを感じます。住んでいる人間も自然と家に対する誇りが生まれますし、そしてこれを残していくなければという想いから、日常の暮らしを丁寧にしていくという気持ちにさせられますね」。

リノベーションは、すべて和室だった各部屋の壁を取り払い、日本家屋特有の廊下も部屋のスペースの一部を取り込んでフローリングフロアとするなど、躯体だけでなく、部屋それぞれについても非常に繊細に、かつ大がかりに進められた。





西部地区の  
住民にきいた  
ココは○だけど、  
ココは×。



●とにかく街が美しいところが好き。巴大橋から自宅方面に向かって車を走らせているとき、函館山の麓の斜面に立つ西部地区の家並みを見ると感動する覚えます。(S.K・自営業)

●建物がかわいい。そこにあるだけで癒される。(さなえ・学生)

●バブル時代に建てられたマンションがいまだに景観を邪魔している。(T・自営業)

●全体的に人がいい。性格がカラッとしている。年寄りですら詮索しないので非常に住みやすい。(NY・主婦)

●函館山と坂は車両通行を禁止にするべき。そのかわり麓に駐車場をもっと増やせばいい。(カツオ・会社員)

●青空駐車が異常です。路上駐車用のコインパーキングにしたらいいのに。(K・学生)

●谷地頭から函館どつくまで、端から端まで歩いて観光できるコンパクトさがいい。(KY・会社員)

●かわいい建物、印象的な建物がどんどん壊されていきますよね。西部地区にも反映されている国の空き家対策特措法は悪法だと思います。(田中・パート)

●船見町など、函館山に近い上の地区は野良猫を町おこしに使えば人も行くし、好感度も上がると思う。(田端里恵・主婦)

●なんといっても十字街と宝来町商店街の街並みがよい。もっと積極的に歴史的建造物が生かせるよう、全体的に町ごとデザインを統一してほしい。(毛利毅・無職)

●こだわりの強い人、個性的な店が多く面白い。(しもだ・自営業)

●市民団体が多くて活動も積極的ですが、ボランティアの範囲での活動も多いので持続可能性に乏しい場合がある気がします。※ボランティア活動が悪いという意味ではないです。(YO・団体職員)

●小さくて個性的なコミュニティはあるが、それが逆に街に入り込みたい人にとってはハードルの高さを感じる街かもしれないです。(鳴田亨・自営業)

●月極、コインパーキングとともに、土地が空いてるわりに駐車場が少ない。(Y・無職)

●坂が多く、冬は歩道の除雪がされない道も多々あるので歩行者にとって条件が厳しい場面がある。そのせいで冬は車道を歩く人もいるので危ない。(HT・主婦)

●よそ者をあたたかく受け入れる寛容さを感じる場面が多いです。多様性がある街。(ナカイサトミ・サービス業)

●数年前に移住した者です。おおむね不満はないんですが、人口が少ないので匿名性が低いのがたまに息苦しかったりもします。(MM・会社員)

●街並み保全の策が、ことごとく保守的になっている場面があるように感じます。(MK・会社経営)

●移住組ですが、海や山などの自然にふれるにも買い物に出るにも、散歩レベルでどこにでも行けるコンパクトさが一番魅力。なによりも「函館に住んでるなあ」という実感があり、住めば住むほど好きになる。(吉村正・自営業)

富樺 雅行  
再生の街、建築失がに好く大切な思いらう。



すっと脳裏に焼き付いて離れない風景がある。千葉の高校を卒業後、旭川の大学に進学して工学部建築科を専攻。その大学生活のなか、友人らと小旅行で函館に訪れたとき。そして大学卒業後、建築家としてのキャリアを函館からスタートさせたとき。「とにかく西部地区に残る古い建築物そのものと、それらがつくる街並みが綺麗で。不思議な魅力がある街だなと思いました。大学を出たあとに最初に働いた函館の建築事務所をやめて、一旦ここを離れることになりましたが、そのあともずっと印象に残る場所でした」その残像に引き寄せられるように、彼はふたたび函館へ戻ってきた。クラフトマン系の建築家のもとで7年間修行を積んだのち、独立。仕事と生活の拠点は、西部地区に構えると最初から決めていた。「独立する前から、仕事場と家は西部地区の古民家をリノベーションすると決めてました。それはもう、絶対条件と言っていいほど」このかたい決意のもと、西部地区に絞った物件探しで見つけたのが弥生町・常盤坂中腹の古民家。昭和10年築で老朽化が進むこの家のリノベーションに、2年半を費やしてじっくり

とつくり上げた。

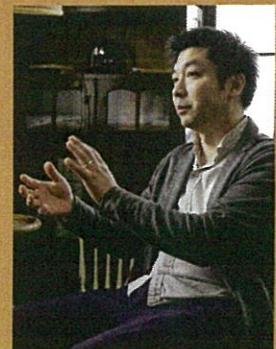
「(西部地区は)普通に歩いていても、一日一回は必ずどこかで『あ、きれいだな~』って思うんですよ。こっちからのこの眺めもいいなとか、四季によっても違うし、常に新しい発見があります。そんな街ってなかなかないと思うんですよね。海もあるし、山もあるし、景観と建物との調和も好きだし、人も好きだし、全部好きですね(笑)」

大三坂の旧仁寿生命と付属土蔵を複合施設にリノベーションした『大三坂ビルヂング』(末広町)や、明治35年築の米穀・海産物問屋『旧松橋商店』(大町)の復元など、西部地区における近年の彼の仕事は枚挙に暇がない。いまや函館におけるリノベーションの第一人者として認知されているが、その数々の仕事の根底にあるのは、老朽化や借り手・買い手が見つからないなどを理由に、この地区から優れた古建築が次々と姿を消していくことへの危機感だ。「半壊程度の物件であれば何とかなる場合があるんですよ。使える・使えないの判断の境目は難しいし慎重さを求められますが、望みが少しもあるなら、そこはなんとかしたいですよね」。



P R O F I L E

愛媛県生まれ。北海道東海大学芸術工学部建築科を卒業後、二本柳慶一建築研究所、五十嵐淳建築設計、小澤建築研究室を経て、2012年に函館で「富樺雅行建築設計事務所」を設立した。





## 国内一番目に建設された近代水道。今も生き続ける一世紀前の設計思想。

1859年の開港から、明治維新を経て貿易都市として発展を続けた函館。しかし、都市化が進んだ西部地区は大きな水場がなく、人々は函館山の麓にあった泉と、亀田川の水を市中に引き入れた願乗寺川の水を生活用水として使用していた。

明治に入り人口の増加が続いた函館では、あらゆる面で水の需要が高まり、本格的な水道建設への要望が高まっていた。そこで、明治12年に黒田清隆開拓長官の命を受けたアメリカ人技術者J・U・クロフォードが、給水人口5万人、1日給水量3100立方メートルの近代水道を計画し、函館支庁長の时任為基に提出。着工へと進みつつあったが、同年発生した大火によって建設費の捻出が不可能になり計画は棚上げされる。

函館が大火から復興を果たした明治20年、北海道府長官岩村通俊の命を受け、クロフォードの計画を

引き継いだイギリス人技術者のH・S・バーマーが調査を行い、当初より大きい給水人口6万人、1日給水量4100立方メートルという計画書を作成。計画は、亀田川の水を沈でん池に導水し、そこから元町配水池に送水して市内各方面に給水するというものであり、政府の許可を受けて明治21年に着工したこの大事業は、平井晴二郎の設計監督のもと、千種基の指揮により行われた。明治22年に行われた竣工を祝う疎水式には数万人もの函館区民が繰り出し、夜は玄関前に灯籠を吊るすなど、街は祝賀ムードに包まれた。横浜から遅れることが2年、日本で二例目の近代水道の完成である。

だが当然ながら街の発展

は水道設備の枠内に納まるものではなく、完成からわずか4年後の明治26年には給水量に不足が見られるようになり、その解消のため、亀田川の更なる上流へ取水施設を増設、元町配水場には高区配水池を新たに設けるなど第一次拡張工事が翌年より行われた。1917(大正6)年から実施された第二次拡張工事では、水圧を受けるコンクリートの止水壁を鉄筋コンクリートの扶壁(ふ

へき)で支える方式のバットレスダム(笹流ダム)を、大正12年に日本で初めて建設するなどして、給水人口20万人、1日給水量25000立方メートルの水道施設を完成させ、現在の函館水道の基礎を築いた。

それまで拡張路線を貫いてきた函館の水道が転換点を迎える時がやってくる。昭和9年3月21日、住吉町から上がった火の手は、渡島半島沖の日本海で猛烈に発達した低気

圧によって大きく煽られ瞬く間に市内を覆いつくす。死者2166名、1万棟以上を焼損させる大災害「函館大火」の発生だ。

これにより昭和11年に函館水道は消火設備の増強と、水道施設の拡張を目的とした第三次拡張事業を開始。函館大火までは地下式消火栓を使用していたが、雪に埋もれてしまうなどの問題点があるため、地上式消火栓を導入。さらに一般的な消



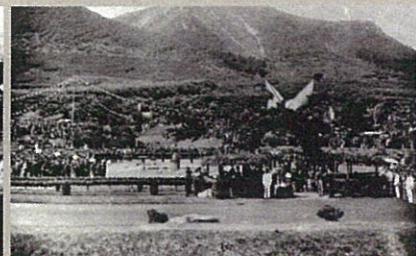
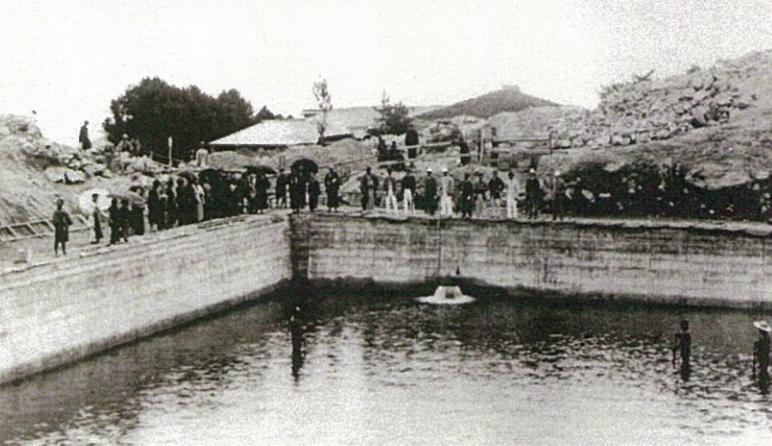
函館山をバックに佇む元町配水場管理事務室  
は、120年前水道創設時に建てられたもの。

その昔、函館山の裏側に「寒川」とよばれる村があった。対岸から見れば断崖絶壁にしか見えない場所に、かつて人が住み着き、集落を作り、生活をしていた。歴史は明治中頃から昭和中頃までの70年ほどだが、ひとつりと生まれ、そして消えて行った廃村について、ここで少し紹介したい。

まず初めに、函館山を背にした寒川

村の地形についてふれておこう。資料によれば海岸線に沿って400m、奥行きは最大47mと非常に狭い居住圏であったとされる。住み着いた人々は富山県出身の漁民で、明治17年頃、あちこちで北海道移住が盛んだった頃、彼らは豊かな漁場を持つこの地に魅

力を感じ、やつて来たという。狭い土地ゆえに人口を抱えることが不可能であつたため、最盛期でも戸数は30戸ほど。なお、いつ開校したか不明だが、昭和18年までは小学校があつたようだ。



赤川で取水された亀田川の水が元町の配水池に初めて注水された時の写真。世纪の大工事の完成を多くの関係者らが見守った。(右下)明治22年9月20日、函館公園で竣工に先立つて行われた疎水式では、大きなアーチが立てられるなどして水道工事の完成を盛大に祝った。(左下)大正6年から7年の歳月をかけて行われた第二次拡張事業では、日本初の扶壁式ダムである笹流ダムの築造や元町配水池覆蓋工事などが行われた。



すぐそばの函館が近代化していく中で、水道や電気が通らず、漁業を生業としながら基本的に自給自足の生活を送っている寒川は徐々にその生活共同体が崩壊をはじめる。太平洋戦争から戦後しばらくを乗り越えたものの、最後は昭和29年の洞爺丸台風により壊滅的な被害を受け、その小さな村は短い歴史に幕を下ろすこととなつた。

函館市街と寒川とを結ぶ動線についてよく語られるのが「吊り橋」の存在だ。かつてあつた穴澗海水浴場のトンネルを抜けて進むと、海面5mほどの高さに岸と岸を結ぶ吊り橋があつた。しかし、この吊り橋がもろく、時代のためによく落下していたようではしばしば切斷していたという。なお、函館への動線は、この吊り橋が、穴澗手前的小トンネルわきの急斜面を超える「勘七落し」と呼ばれる危険なルートか、あるいは沢づたいに山越えをするかのいずれかだったようだ。「陸の孤島」とも呼ばれた寒川らしい話だが、しかし、昭和に入つてからの記録では、学校遠足、海洋訓練、観光関係者の視察など、函館側からの来訪も少なくなかつたようだ。

函館市街と寒川とを結ぶ動線についてよく語られるのが「吊り橋」の存在だ。かつてあつた穴澗海水浴場のトンネルを抜けて進むと、海面5mほどの高さに岸と岸を結ぶ吊り橋があつた。しかし、この吊り橋がもろく、時代のためによく落下していたようではしばしば切斷していたという。なお、函館への動線は、この吊り橋が、穴澗手前的小トンネルわきの急斜面を超える「勘七落し」と呼ばれる危険なルートか、あるいは沢づたいに山越えをするかのいずれかだったようだ。「陸の孤島」とも呼ばれた寒川らしい話だが、しかし、昭和に入つてからの記録では、学校遠足、海洋訓練、観光関係者の視察など、函館側からの来訪も少なくなかつたようだ。

すぐそばの函館が近代化していく中で、水道や電気が通らず、漁業を生業としながら基本的に自給自足の生活を送っている寒川は徐々にその生活共同体が崩壊をはじめる。太平洋戦争から戦後しばらくを乗り越えたものの、最後は昭和29年の洞爺丸台風により壊滅的な被害を受け、その小さな村は短い歴史に幕を下ろすこととなつた。



現在寒川村の痕跡を探すのは難しく、現地には手堀りのトンネルや神社跡などを記す石碑、住居跡と思われる石垣がわずかに残るのみ。なお、廃村後も穴澗海水浴場へ来た延長で遊びに出向く者も多く、一時はホテル建設の計画が持ち上がった時期もあるとか。今では「秘境」「行きもだめし」的な探検スポットとしても知られるが、たどり着くまでの道のりが険しく立ち入り人はほとんどいない。

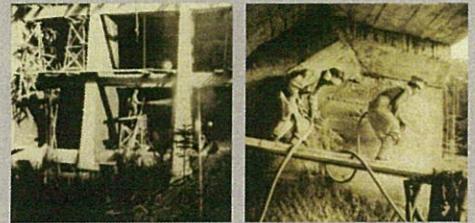
## 廃村「寒川」の話。



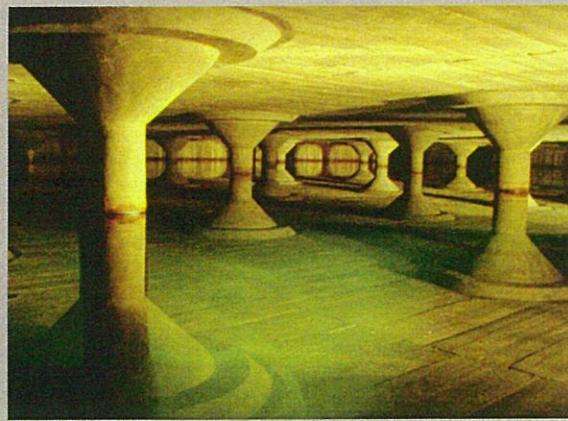
函館市街と寒川とを結ぶ動線についてよく語られるのが「吊り橋」の存在だ。かつてあつた穴澗海水浴場のトンネルを抜けて進むと、海面5mほどの高さに岸と岸を結ぶ吊り橋があつた。しかし、この吊り橋がもろく、時代のためによく落下していたようではしばしば切斷していたという。なお、函館への動線は、この吊り橋が、穴澗手前的小トンネルわきの急斜面を超える「勘七落し」と呼ばれる危険なルートか、あるいは沢づたいに山越えをするかのいずれかだったようだ。「陸の孤島」とも呼ばれた寒川らしい話だが、しかし、昭和に入つてからの記録では、学校遠足、海洋訓練、観光関係者の視察など、函館側からの来訪も少なくなかつたようだ。

火栓の多くは、赤い塗装で放水口がひとつだが、函館では、黄色い塗装で放水口が三つある「函館型三方式地上式消火栓」という独自に設計したものを昭和12年から使用するなど、防火対策に力を注ぎ、それは現在も継承されている。

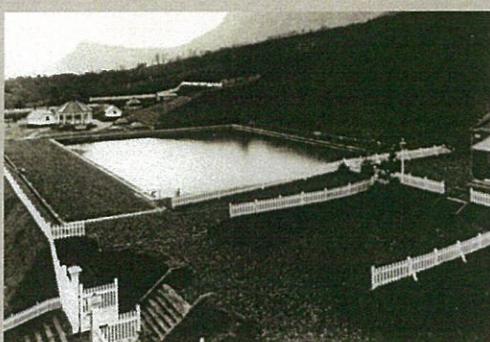
言うまでもなく都市機能に水は必要不可欠な存在だ。その点において函館は恵まれていなかったが、先人たちの膨大な工夫と努力で現在の安心で快適な生活を実現した。ひねれば出てくる函館の水はこんな変遷をたどってきたのだ。



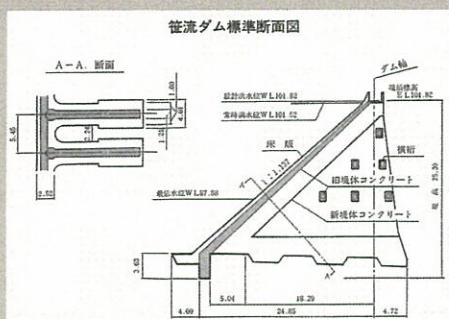
笹流ダムは現在国内に6基ある扶壁式ダムの一つで、昭和58年の改修工事を経て現在の形になった。(写真は堤体風化防止工事を行った昭和24年のもの)



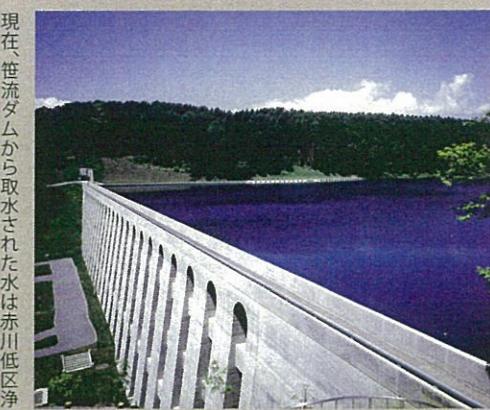
元町配水池内部、まるで神殿のような風景が広がる。(一般公開はしていない)



明治22年、無蓋だった完成当時の元町低区(現在は中区)配水池。



現在、笹流ダムから取水された水は赤川低区浄水場から市内中心部へ配水。元町配水場へは赤川高区浄水場(写真)から送水されている。



## 祝福のステンドグラス

0138-24-6222

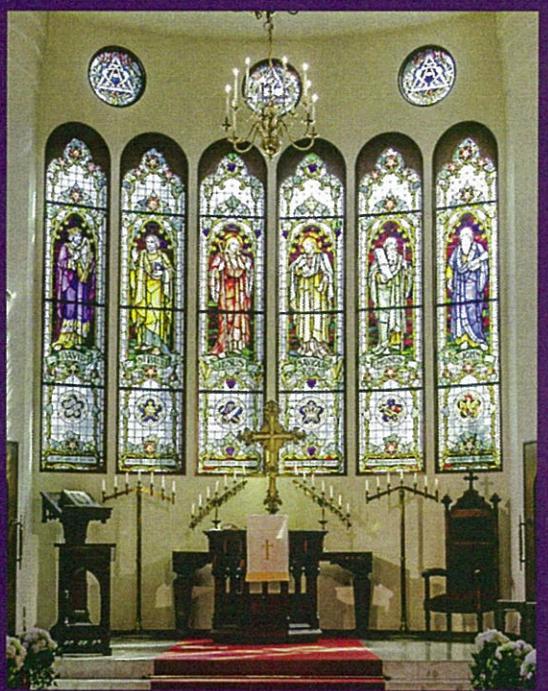
函館港と市街地を見渡す船見町の高台にあるブライダル専用チャペル『函館聖マリア教会』。1995年に函館の貸衣装業「若松屋衣裳店」が開業し、2年前にホテル・結婚式場の運営会社『イマジン』(青森県)が購入した。その聖堂の中、天井高10m・全長18mのバージンロードの向こうに、このチャペルを象徴する大きなステンドグラスがある。これは1860年代にイギリスのマンチェスター・セントバーソロミュー教会で実際に使われていたもので、開業にあたり若松屋衣裳店のオーナーが海外から直接買い付けたもの。この季節は、午前10時過ぎに西側から太陽光が差し込み、ステンドグラスはまるで命を宿したかのように輝きを増す。描きこみや着色も驚くほど繊細で、およそ160年以上が経過しているとは思えない鮮明さを保っている。

描かれているのはイエス・キリストとそのしもべである聖人たち。中央の2枚がキリスト、向かって左端がイスラエル王国のダビデ王、そのとなりが使徒パウロ。右端がキリストの愛弟

## ●函館聖マリア教会(函館市船見町8-21)

子・使徒ヨハネ。そのとなりが預言者のモーセの姿。また、館内の階段踊り場にも同時代のステンドグラスがあり、洗礼者ヨハネとイエス・キリストの姿が描かれている。

聖堂の中央上の3枚の丸窓と両側の窓にもステンドグラスが施され、丸窓の中央は三位一体の「父と子と聖靈(三角形)の神」を表し、聖靈を意味する鳩が描かれている。左右の2枚はそれぞれギリシャ文字で「アルファ」と「オメガ」が書かれ、「最初(アルファ)にして最後(オメガ)なるキリスト」を表している。



## NATURE OF MT. HAKODATE



**目** をつぶってもはつきりと思い描ける、というほどに日々の視界にいつも映っている函館山は、西部地区の風景に愛着をもたらす魅力のひとつ。その歴史を少し紐解いてみると、松前藩時代には「はげ山」と呼ばれるまで木材が伐採され、明治戦中期には日本陸軍の要塞に、そして現代では夜景をはじめとする函館観光に欠かせない名スポットと、時代ごとに特徴ある役割を果たしてくれている。そしてさらに、植物や動物といつた山本来の「自然」の視点で眺めてみても、そこには「函館山ならでは」と言える多様性がある。

では、その多様性について語るとき、欠かせないのが『フラキストン・ライン』

というキーワードだ。これは津軽海峡を境に北海道と本州で哺乳類や鳥類の分布が異なるとする動物地理学上の分布境界線のこと。提唱者は、1863年から20年間函館に来住していたイギリス人貿易商で博物学者のトーマス・ライト・フラキストン。そして、氏がこの境界線を見出したきっかけとなるのが、函館山の野鳥の存在だ。海峡に突き出た函館山は、一面だけが市街地に接し、他の急峻な三面は海に囲まれているため、野鳥にとって四季を通じて居住できる「楽園」となる。また、津軽海峡を南下・北上する渡り鳥が休息に訪れることで、多種類の鳥が集まるという独特の環境を持つ。ちなみに函館山は、天然記念物であるコク

ガングが越冬することでも有名で、ほかにも寒冷地では越冬出来ないと言わされているメジロに越冬観察がある。これら渡り鳥を含め、多いときでは1年を通して約150種の野鳥が見られたことから、バードウォッチングに最適な場所としても知られている。

動物に目を向けてみると、『フラキストン・ライン』を北限とする動物は、ニホンザルやイノシシ、ツキノワグマ、ニホンカモシカ、モグラなど。南限は、ヒグマ、エゾシカ、クロテン、シマリスなどだ。なお、函館山には哺乳類ではキタキツネ、シマリス、ネズミ2種、ヒナコウモリ、キクガシラコウモリ、ホンドイタチなど、爬虫類にはニホンマムシ、アオダイショウ

ウ、ジムグリ、ニホントカゲなどが生息している。函館山は、北海道で観察される3分の1にあたる600種以上の植物が確認されている。温帯北部に属することで、東北東部との共通種が多く、北海道にありながら本州的要素の濃い地域というのが大きな特徴だ。種の数にして約70%が本州北部のものと同様であるといふ。また、函館山は軍の要塞として過去半世紀に渡り一般的の立ち入りが禁止されていたため、自然状態は比較的良好に保持され、市街に隣接した狭い地域でありながら、自然豊かな環境を作り出しているという。

取材協力／山田良子

WEST HAKODATE(ハコダテ・ウェスト)  
2021年3月31日号  
発行／西部地域振興協議会(事務局)  
〒040-0063 函館市末広町14-12 金森商店(株内) 0138-23-0350  
編集／PEEPS HAKODATE編集部  
※本誌記事・写真・レイアウトの無断転載を禁じます。

## 明治40年建造の蔵をリノベーションした多目的フリースペース。

弁天町・電車通り沿いに建つ明治40年築の蔵をリノベーションした『spAce ICHIGoCHIe』(スペース イチゴイチエ)。こちらは一般宅の一部で、家主は蔵の2Fで暮らしている。普段は家主がこれまでにアジア各国を渡り歩いた「小さな旅」で撮りためた写真を展示。営業日も営業時間も決めておらず、気まぐれに扉が開いているときに中を覗くことができる(事前連絡で開ける場合もあり)。また、アートギャラリーやライブスペース、ワークショップ、ポップアップショップなどイベントスペースとしての活用も可能。これまで『バル街』での販売スペース提供やアコースティックライブなどの実績もあり(ピアノも常設)。気になる方は気軽に相談を。

函館市弁天町16-2/080-7859-7304



ル、ぜひあなたも。  
函館市弁天町9-9/0138-23-0713

### ● 塩辛ピザに塩辛餃子 ここでしか買えない レア品が買える直売店。

全国にファンをもつ弁天町・小田島水産の塩辛。創業は大正3年で、先代の小田島喜一郎が塩辛づくりを始めたのが昭和22年。以来、秋田発祥の「こが」(味噌仕込み用の杉樽)と、ロシア発祥の「ボウチカ」(ウイスキー用の杉樽)を使い、【木樽仕込み】の製法を貫いている。工場併設の直売店では定番品だけでなく、冷凍の「塩辛ピザ」や「塩辛餃子」など、スーパーで扱っていないここだけの商品が買える。

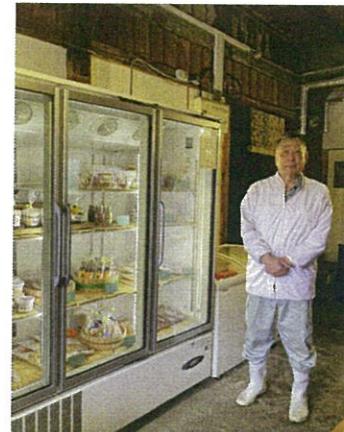
函館市弁天町20-7/0138-22-4312/  
営業8:00~20:00/年中無休



### ● 海の男たちに 大切に祀られてきた 函館の厳島神社

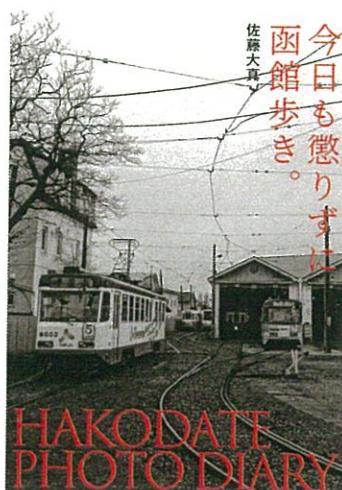
国宝であり、世界遺産にも登録されている広島県の厳島神社。平清盛が創建したこの由緒ある神社の分社が、函館市電どつく前のすぐそばにある。創建は江戸時代前期と言われ、何度も場所を変えながら幕末に現在地へ。古くから海の守護神として海や船の仕事に携わる漁師や商人に祀られてきた。祭神は「市杵島姫命(いちきしまひめのみこと)」。そしてもうひとつ、境内には函館山七福神の神社である「弁財天・恵比寿堂」がある。弁財天は、七福神のなかで唯一の女性神であり、芸能の才や福德財産、航海安全などの神として知られるが、同神社にはこの弁財天が淨瑠璃を弾く姿のオリジナルのお守りがある。

芸事に携わるひとがお参りをかねて買い求めいくことが多いとか。函館にあるひそかなオリジナ



### ● 函館を愛してやまない 大阪人が撮りためた 哀愁漂うまちの写真集。

大阪・守口市で葬儀会社を経営する佐藤政之さんによる写真集『今日も懲りずに函館歩き。HAKODATE PHOTODIARY』は、旅で訪れた函館に魅せられた佐藤さんが、4年ほど前から趣味であるカメラを持って街を隈なく歩いて撮りためた風景写真を中心に構成されている。「どこか懐かしくて、どこかうすら寂しい。そこが函館の魅力」と語る彼の写真は、曇天のベイエリアや人影のない住吉漁港や谷地頭電停、寂れた弁天倉庫街、昔と変わらない函館公園「こどものく



に」の観覧車など、キラキラと輝いた観光写真と対極にある地元民の生活目線に溢れた情景に溢れている。また、本編では食べ歩きの好きな佐藤さんによる「食の記録」も収められており、彼が愛してやまない函館駅前の立ち呑み屋『瀧澤商店』や、宝来町『元祖 インドカレーの小いけ』や『宝来パン』(現在は休業)なども掲載されている。

価格1,100円(税込)※函館 蔦屋書店、栄文堂書店(十字街)、市立函館博物館郷土資料館(末広町)で取り扱うほか、ネットショッピングでも購入可。

### ● 食堂目的で訪れる人も。 谷地頭温泉食堂は 決してあなどれない。

市民憩いの場『谷地頭温泉』1Fの食堂は、ここでの食事を目的に訪れる人も多い隠れた人気スポット。サクサクで揚げたての天丼630円、えび天そば640円など、価格設定がとことん良心的。さらに塩ラーメン(480円)は透明感のあるスープがベースの純函館風。うるさがたも「専門店に引けをとらない味」と賞賛をおくる。

函館市谷地頭町20-7/  
0138-22-8371(代表)/  
営業11:00~14:30・17:00~19:30(土日  
祝は通し営業) / 第2・第4火曜休  
※価格は令和3年2月時点のもの

当協議会の活動について。

西部地域振興協議会は、函館の中心市街地(駅周辺)から西部地域を「はこだての原風景」と認識し、観光の街はこだての魅力向上と活力ある街づくりを目的として、平成5年に設立しました。地域住民の方々(西部地域各町会)や、西部地域・または函館に事業所を置く各企業の方々のご協力を得ながら、函館市への陳述活動(平成5年~現在)、中心市街地再生プロジェクト実証実現事業(平成21年)、各種シンポジウムの開催など、様々な活動をしてまいりました。そして今回、コロナ禍によって活動が制限される中においても、地域の魅力を伝える活動は継続したいという思いが結実し、この『WEST』を発行する運びとなりました。本誌を通じ、あらためて西部地域の魅力に触れていただけないと嬉しいです。

国際都市としてさらなる発展を 未来に羽ばたくまち函館

WEST 函館市西部地域振興協議会